

平成三年

男鹿半島、戸賀

顔寒くごんこの如く目覚めけり

ごんこはコンペイトウ科の魚、体形は球形。腹鰭は吸盤を

なし、吸物等にして食す

軸物のえびす見下ろす年の膳

みやうみやうと海はるかより初声す

海牛の二日の波にたゆたへり

椿

五ツ六ツいやもうひとつつばき咲く

八郎潟

やおろちのうみの初東風萱鳴らし

賀状来て曰くぽちぽちやつてます

二つ目の蜜柑の臍のずれてをり

三浦半島・長沢、左義長

ふぢづるをきりりとおんべの胴くびれ

魂消たりおんべの胴の大破裂

おんべの灰ゆらりと鴉立つごとし

手負ひめきおんべどしりと崩れけり

音頭取三人かたまりちやつきらこ

店も狭に緋扇舞はせちやつきらこ

電気毛布なんぞと云ひて取合はぬ

風の中梅の徒長枝日を恋へる

早咲きも早咲き明王院の梅

つまさきだち緑萼梅を嗅ぐ男

ぬかるみに嵌り其処より梅を見る

しぶしぶと煤け紅梅咲き出せり

梅林をざつと見て来ぬ鼻つ風邪

枝ぶりに齡歴たる寒牡丹

蒼解くさんしゆゆ雨を心待ち

まんさくのカイゼル髯の風そろと

山茱萸の黄にむらありて鄙曇

さんしゆゆの鶉色に母屋没しけり

薄ら日に三椏密語交しをり

糠雨に垂るゝ木五倍子の寸足らず

冷つこき雨にいきなり桃咲ける

ふる雨に桃の葉並び美しき

野蒜摘ちよいちよい摘み処変へにけり

木瓜みんな咲いてしまへり馬鹿陽気

喇叭秘め喇叭水仙蒼めるよ

ぐりぐりの夕顔の種蒔きにけり

拾ひあぐ木蓮一片雨くさき

啓蟄の茶鼠のコピー再製紙

ぱつとせぬ天気つづけり紫荊

だいぶ水ぬるんで来たりすっぽん鼈塚

ぷるぷると顔を震はせ蚪蚪浮上



こんなにも殖えてどうする諸葛菜

日和よく山桜桃の花の二三日

飛来せる一羽花間へもぐり込む

可借花散らしその形大き鳥  
あたら

花房に縋れる鳥の紡錘形

首伸ばしすくめつ鶉の花食める

鳥の尾の上下頻々花隠り

花を発つ鳥の胴より翼出で

木を替へて花ついばめる鳥嘗々

雨に風加はり花を駄目にする

上林温泉

木の芽風吹きつさらしに猿の面つら

山吹や川波めくれめくれゆく

山腹に鳥を下ろせし遅櫻

岳麓の朝日きびきび山吹に

先つぽに多羅の若木の芽がひとつ

修那羅峠

針通神の薄目にすみれぐさ

宿の灯のくつきり点る濃山吹

葱坊主苞を破りて落慶式

アスパラガス長けて緑の棒畠

恋猫の彼奴此奴が庭通る

天道虫ハイカラな星七つかな

本堂の畳ざはりや棕櫚の花

擦花のどれも動力尽きしさま

一新の街路アメリカハナミズキ

城ヶ島、鍛錬会

明易の顔をふるんと洗ひけり

まんばうのやうな梅雨雲沖にあり

ぶつかつてここは譲れぬ蟹同志

袂抱き磯蟹波をかぶりけり

よき浪が来て海牛を泳がしむ

海牛の泳ぎ歩きといふものす

ぴらぴらと蟹の口許南風吹く

針深く呑みし虎魚の横つ面

げんなりと赤べら魚籠に腹を見せ

でで虫に深淵なせる油壺

だぼ鯨の無茶苦茶走りまたしたり

蟹横に横に夕日を引摺れる

笹茄の搗布つ喰ひに手が伸びて

島人、シツタカ(貝)のことを搗布つ食いと云えば

梅雨晴間小包ぽんと届きけり

小包の紐切る音も夏近し

あれこれと梅酒造りの空壇出す

灯まみれにごきぶりの子のピーナツ色

髭振りつ次はどうでる油虫

とばつちりうけて十薬むしらるる

女貞雨ねずみもちに乏しくなりし花



熟れ枇杷の雫ほたほた地をうてり

抜きとりて雨のにほひのかやつり草

ぶるぶると行手をよぎる梅雨雀

蒸し暑き花掲げたり泰山木

むつとして妻良の明け方ダチュラ咲く

並べ手す手拭三連明易し

浜おもと踏みしむる砂ほこほこと

縞鯛のごとき浴衣と浜に遇ふ

舟虫のしよぼしよぼ歩き雨に釣る

下田、下岡蓮杖の碑

写真術開祖の咲かす濃あぢさゐ

泥を食ふ蟹を見つめて腹空けり

下田稔氏

蟹に眼を凝らして蟹のやうな顔

降り出して干潟を蟹のわらわらと

さんしゆゆの葉裏に蜂の小さな巣

ぴちぴちとくわりん青実あじに雨跳ねて

行く方に朝蝉の杜わつとあり

よれよれとなりて夕日の山車を曳く

団扇風とろけさうなる腕揺りて

掌の中に団扇ありけり昼寢覚

出色の百日紅に汗退けり

ももすずめ 畢

